高校２年生総合人間科

国際理解・人権・平和

三小田　博　昭・渡　辺　武　志
西　川　陽　子・三　島　　徹
山　田　　孝・岡　村　　明
加　藤　容　子

【抄録】　高校２年生では沖縄でフィールドワークを展開し、そこから自分たちのテーマをグループ単位で追求・検証・発表することが大きなねらいであった。しかし、今年度は同時多発テロの発生で例年にない大きな変更を伴った。

【キーワード】　沖縄　フィールドワーク　同時多発テロ　宗教　国際関係　パレスチナ　イスラム教　九州研究旅行　研究協議会

はじめに

61億人まで膨れあがった地球上の人々が共生していくためには、何が必要であり、どのように行動することが求められているのかが大きな課題として今、クローズアップされている。

その課題への取り組みとして国際理解・人権・平和という観点からグローバルに問題をとらえ、平和的共生への方向性を見いだすことを目的にテーマを決定した。

高校２年生はそのねらいのもと11月に毎年沖縄へ研究旅行にでかけ、現地でのフィールドワークに中心を置いた学習に取り組んでいる。今年度も４月当初から沖縄への意識を学年全体で高め、沖縄戦を含め、過去から現在を学び、そして未来へのステップとして高校２年生の総合学習を展開する予定ですすんでいた。

しかし状況が一転したのが９月11日、ニューヨークでの国際センタービル崩壊を境に我々のすすむべき方向が180°転換することが余儀なくされた。保護者を含めた学年全体に動揺が走った。「いままで研究してきた内容はどうなるのか？」「もう数ヶ月後に迫った研究協議会はやるのか？」「いまさらテーマを変えるなんて可能なのか？」もうすでに沖縄でのフィールドワーク先を決定しており、訪問相手との約束まで取り付けている生徒も中にはいた。

保護者へのアンケートをした結果、約半数の方が「今回は中止」「場所を変更」といった答えが返ってきた。新聞紙上でも沖縄修学旅行中止の記事をよく目にするようにもなった。旅行会社からの情報もはっきりとしない。そのような状況を踏まえ、今年度の本校における沖縄研究旅行は中止となった。

逆境を逆手に

10月に入ると、研究協議会へむけてのテーマ変更、学年目標の再設定へ流れが移行した。「今まで学習をしてきた、沖縄関係を無にしたくない。」「なぜそのようなテロが起きたのか。」

「僕たちには関係ないのに旅行が中止になった。」と意見を交えているうちに、全体の流れは、『なぜ沖縄研究旅行が中止になったのか、考えよう』から始まり、いっそそれをテーマにしてみても興味深いものができるのではないかという意見が主流を占めるようになった。そこで新テーマである【私たちの沖縄研究旅行を返せ！】が生まれた。中止になった現状を逆手に捉えその根本を見詰め直すことにより、中止の理由を自分たちで探し、自分たちを納得させようという意図が働いたのである。

一方それと平行して、生徒の代表である旅行委員会を中心に新しい研究旅行先の選定がまったくのゼロの状態からスタートした。何回にもわたる、アンケート。授業後、遅くまで長引くこともよくあった旅行者との打ち合わせを経て、新旅行先「九州研究旅行」が決定した。この「九州研究旅行」も単なる観光就学旅行でなく、随所に研究を入れた研究旅行が中心となったことにも、生徒たちの意識の高さが現れていると言える。

学年のテーマ（４月当初）
《見て・感じて・考える 沖縄》

「沖縄から世界が見える」を合い言葉に単なる観光旅行ではない沖縄を体験し、そこから平和のあり方を考え、未来を展望することを目的にテーマを絞った。部屋に居ながらにして、書籍やインターネットから現在では多種多様な情報を入手することができる。また、沖縄戦に限らず、戦争に関する映画が世に溢れているし、コンピュータゲームを利用しある意味、戦争はリアリティーを持って擬似体験することができる。それだけでも十分満足のいく調査・研究・発表は可能である。しかし、その研究のフィールドが図書館や自分の部屋だけであるのはいかにも物足りない。フィールドを現地に求めて、自分の目で現地を見、体験談を聞き、感じ取ることによってこそ、事前学習によって得た情報に現実味が増すのである。その意味で今回の学年テーマを決定した。

学年のテーマ（同時多発テロ以降）
《私たちの研究旅行を返せ！》

「戦後沖縄が歩んできた道」「なぜ、沖縄研究旅行が中止になったか」「なぜテロが発生したか」の３大テーマから沖縄・国際関係・宗教と現代という側面から沖縄研究旅行が中止になった背景を高校生の視点で捕らえる。９月11日に日本から遠く離れたアメリカニューヨークで起こった出来事が世界を震撼させた。テレビのブラウン管を通して、徹夜で惨状を見つめていた生徒も数多くいた。しかし、ある意味その出来事や惨状が自分の身に何らかの影響を及ぼすとその時、感じた生徒はそれほど多くはなかっただろう。「沖縄研究旅行中止」という形をとって我が身に影響が及んだとき、初めて日本と世界の関係、ひいては自分と世界の繋がりを感じ取った生徒も多いことであろう。この新テーマを通して、自分も世界の一員であるという認識を持つことも視野に入れ、この新テーマを設定した。

年間学習経緯

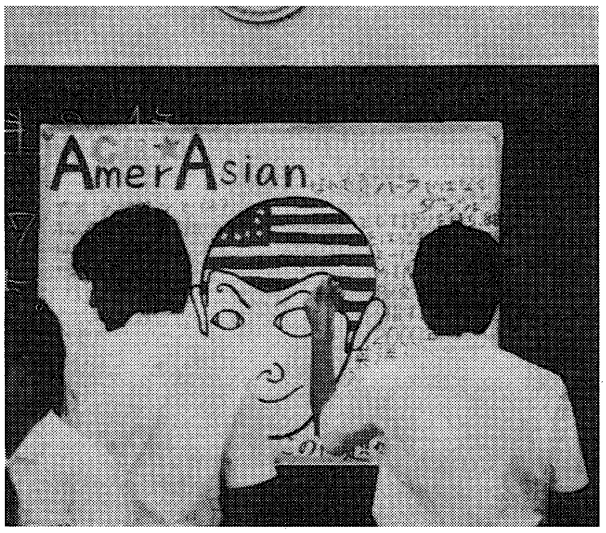
第１回　４月16日（月）　オリエンテーション
第２回　　21日（土）　沖縄プレ研究　発表準備①
第３回　５月19日（土）　沖縄プレ研究　発表準備②
第４回　６月２日（土）　沖縄プレ研究　発表準備③
第５回　　16日（土）　沖縄プレ研究　発表準備④
第６回　　30日（土）　沖縄プレ研究　発表　①
第７回　７月７日（土）　一日総合大学
第８回　　16日（土）　沖縄プレ研究　発表　②
《９月11日（火）　アメリカでテロ発生》
第９回　９月29日（土）　沖縄研究旅行グループ決定
フィールドワーク事前学習①
第10回　10月６日（土）
フィールドワーク事前学習②
《12日（金）　保護者に沖縄研究旅行中止を連絡》
第11回　　20日（土）　新３大テーマでの研究開始
第12回　11月17日（土）　名古屋大学法学部　佐々木教授「アフガン情勢」講義
第13回　12月13日（木）　名古屋大学教育学部　西野教授「イスラムと世界」講義
第14回　　15日（土）　名古屋大学文学部　若尾教授「平和的世界への希望の原点」講義
第15回　２月２日（土）　新テーマでの発表準備
第16回　　16日（土）
新テーマでのグループ内発表
第17回　　21日（土）
研究協議会　新テーマでの全体発表
その他　木曜日ＬＴを利用して学習会を開く

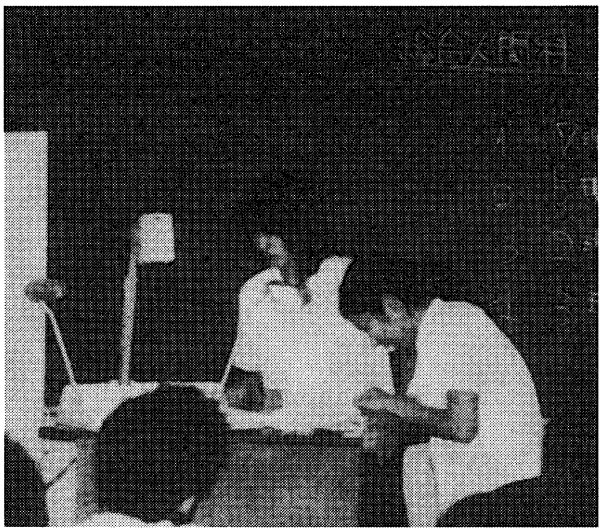
沖縄プレ研究

例年、沖縄研究旅行へ出かける前に、生徒をグループに分け与えられたテーマを調べ学習する仕組みをとっている。今年度も例年のように６つの大きなテーマに分けた。名古屋に居ながらにして遠く沖縄のことを調べることにはある程度の制限はあるものの、インターネットや書籍、沖縄県人会などを利用して多くのことを調べ、発表することが可能であった。

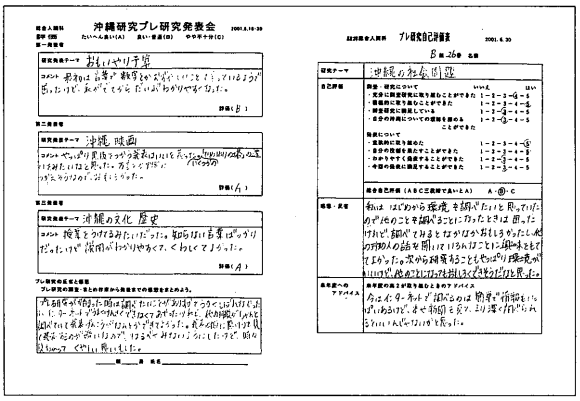
① 沖縄の自然グループ（気候　風土　植物　など）
② 基地問題グループ（安保条約　人権問題　など）
③ 沖縄の産業グループ
（観光　リゾート　土着産業　など）
④ 沖縄の文化グループ（歴史　工芸　など）
⑤ 沖縄の食生活グループ（食文化　など）
⑥ 沖縄戦グループ（ひめゆり　地上戦　など）

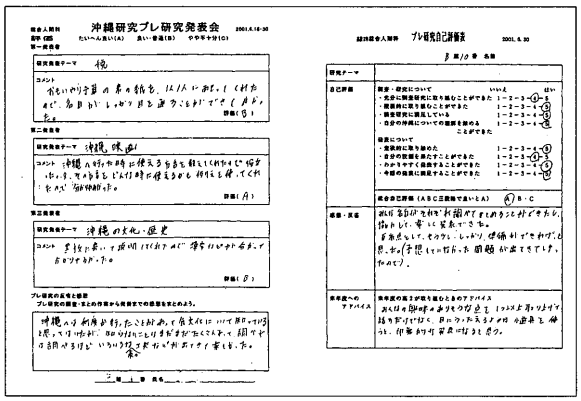
発表の様子

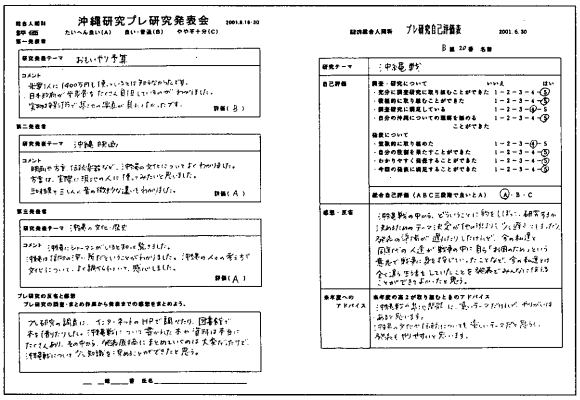


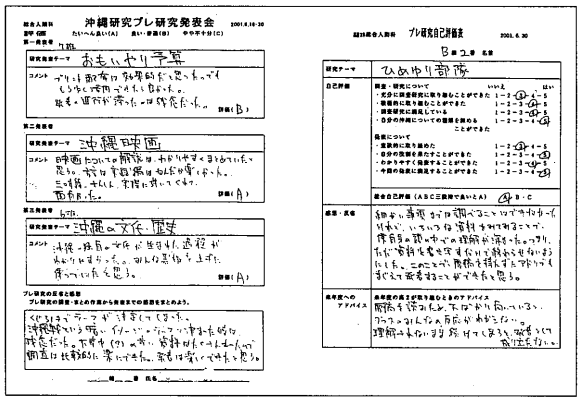


生徒の個人評価用紙









９月11日　アメリカニューヨークで同時多発テロ発生。→　沖縄研究旅行中止　→　テーマ変更

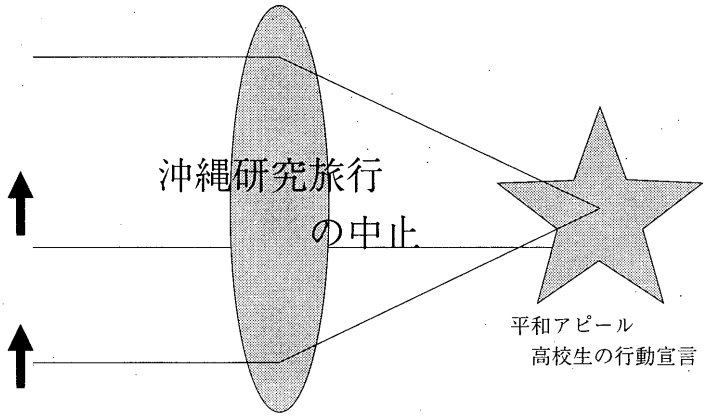
新３大テーマでの研究開始

（学習方法と形態）

・沖縄関係　基幹報告
　　補足報告
　　専門家より

・国際関係　基幹報告
　　補足報告
　　専門家より

・宗教と現代　基幹報告
　　補足報告
　　専門家より



大学との連携を足がかりに

10月以降の方向性は大まかに決まったものの、同時多発テロの発生した具体的背景を十分に知っている生徒どころか教員すらいない状況であったために、名古屋大学の協力を仰ぐこととなった。名古屋大学には様々な分野を研究している教授がたくさんいる。彼らから直接講義を受けることによって、少しでも現代の社会情勢がわかればと、協力を願い出た。その結果、「宗教と現代」に関しては名古屋大学教育学部から西野教授。「沖縄関係」については名古屋大学文学部から若尾教授。そして「国際関係」については名古屋大学法学部から佐々木教授にそれぞれ講義をしていただく運びとなった。

名古屋大学法学部　佐々木雄太教授「アフガン情勢」講義

過去から現在にわたる中東関係の諸問題について講義いただいた。パレスチナ問題に始まり、今後のアメリカとアフガニスタンの行方などにも言及していただき、生徒ひとりひとりが、アメリカと中東との関係について理解を深めた。また日本が今後あるべき姿についての先生の考えも披露していただき、国際社会の中の日本の立場についても学ぶことができた。

名古屋大学教育学部　西野節男教授「イスラムと世界」講義

日本に住む者にとってなじみの薄いイスラム教について具体的に教わることができた。イスラム教自体の中に存在するであろう善と悪。世界の３大宗教にもなっているのに、なぜか日本ではなじみが薄い。しかし、日本国内にも多数のモスクがあり、たくさんの信者がいることもわかった。西野先生自身が考える国際関係の理論にも触れ、そこから今度は、生徒がそして教員もこれからの国際関係について宗教面から考えを深めることができた。

名古屋大学文学部　若尾祐司教授「平和的世界への希望の原点」講義

以前、琉球大学にみえた若尾先生から沖縄戦を中心に語っていただいた。ビデオなど視聴覚教材を用い、時にはなまなましい映像に身を震わせながら、沖縄が歩んできた道を知ることができた。なぜ沖縄をはじめとするアジア諸地域にアメリカ軍が駐屯しているのか。など、沖縄研究旅行中止の理由を垣間見させていただける内容の講義に、生徒だけでなく教員も取り込まれていった。

以上３名の講義をもとに３つのグループ（沖縄関係、国際関係、宗教と現代）に分かれていた生徒はさらに小グループを作り、自分たちのテーマを掘り下げていき、それぞれのグループ内で討論や発表を重ね、グループ内での共通理解を深めていくことになった。

研究協議会（２月22日）公開授業100分

当日公開授業の流れ　　助言者　名古屋大学教育学部　　植田健男教授　名古屋大学法学部　　佐々木雄太教授

時間	学　習　内　容	指　導　内　容・留　意　点	評価の観点
導入 ５分	司会のあいさつ	司会より本日の授業についての趣旨説明 本日の進行（流れ）を全体で確認	生徒自身による自己評価・相互評価を行う
展開 ８５分	「宗教と現代」のグループより基調報告 パネリスト２人により研究内容の発表 関連事項の補足 質疑応答 「国際関係」グループより基調報告 パネリスト２人により研究内容の発表 関連事項の補足 質疑応答 沖縄学習のまとめ 「なぜ沖縄研究旅行は中止になったのか」 「沖縄」研究グループより基調報告 関連事項の補足 質疑応答 まとめ 高校生の行動提起 平和セレモニー 平和宣言文へ	グループの発表は１５分程度に簡潔に 他のメンバーからの補足説明 同時多発テロについての理解を深める 質疑応答は１０分程度 グループの発表は１５分程度に簡潔に 現在の国際関係を理解を深める アフガニスタン情勢を理解する アンケート結果　高校生の意識を分析 質疑応答は１０分程度 基調報告は、これまでの沖縄学習のまとめになることを確認する グループの発表は１５分程度に簡潔に 質疑応答は１０分程度 旅行委員より提起	パネリストだけでなく、フロアーも積極的に参加し、相互評価を行う 発表者を評価するだけでなくフロアー参加者も自己評価を行う 相互評価では、報告者へのアドバイス・コメントも記入する
まとめ １０分	終わりの言葉	記録用紙・評価用紙に記入	各人で評価用紙に記入

新テーマでの発表

宗教と現代

今回の同時多発テロに関連する事項として、「パレスチナ問題」についての報告がなされた。それによりイスラエルとアメリカの関係、アラブ諸国とイスラム教の関係。そしてアメリカとアラブ諸国の関係に触れた。その後、「イスラム原理主義」に関する報告がなされ“イスラム原理主義は過激組織ばかりなのか”という発表が行われた。そして「アフガニスタンとタリバン」問題に話題が移り、つづいて基調報告「国際関係」からの発表につながった。

国際関係

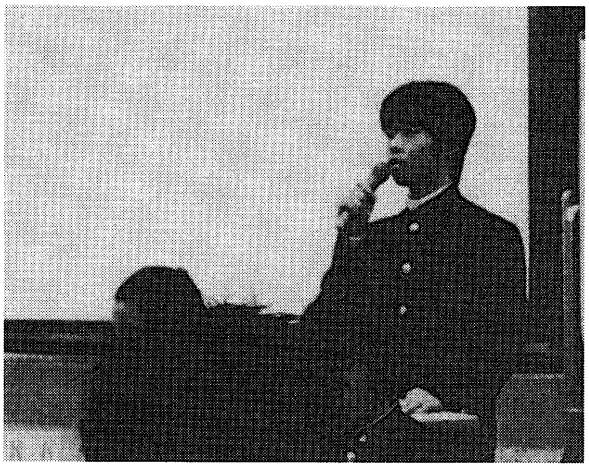
会場が暗くなり、ミラーボールのまわる中、生徒自作の湾岸戦争に関するビデオ報告が始まった。アメリカ軍が最新兵器を用い、イラク軍を攻め込むシーンが現れる。「劣化ウラン弾」の人体に対する脅威。その総数は94万発も打ち込まれたと報告がある。ここから見受けられるひとつの姿に、現代版の戦争特徴が表れている。

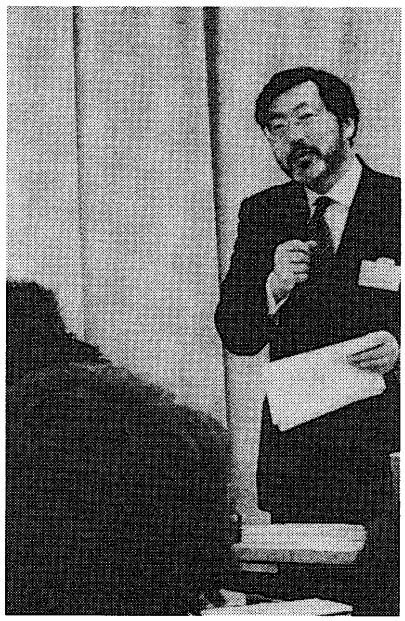
続いて、国際関係の中での日本の位置付けに関する報告が行われた。日本国憲法第９条に触れ、極東における安保体制が地図、プロジェクターを用いて発表された。そして最後にこの同時多発テロにはいわゆる「南北問題」が絡んでいるのではないか。貧富の差についての意見も加えられた。

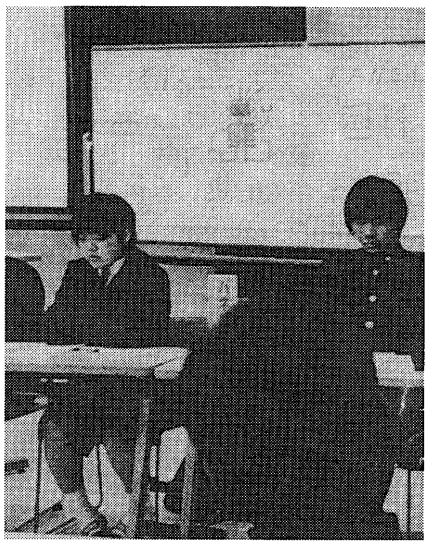
沖縄

上記２つの発表をうけ、本題であるなぜ「沖縄研究旅行が中止」になったかが、話題となった。沖縄における米軍駐留に始まり、話題は“思いやり予算”や“軍事費”“安保条約”に及び、話題が広がった。生徒も自分たちの研究旅行が中止になった背景には特に興味があり、活発に質問が飛び交う中、基調報告が終了した。

研究協議会の様子







研究協議会一般参加者の声

・すばらしい授業をありがとうございました。今日の発表会に至るまでのご指導があってのものだと思います。先生と生徒の総合にかける熱意の程が伝わりました。（栃木県 高校教員）

・生徒たちが生き生きと発表しており、100分という時間があっという間に過ぎました。沖縄研究旅行は中止になったが、素晴らしいものを学んだのではないだろうか。（香川県 高校教員）

・高校生が非常に熱心に発表していた。発表の内容・方法ともにすぐれていた。（佐賀県 中学教員）

・プレゼンは上手でなかった。「返せ！」・・・誰に？不明。事実なのか、感想なのか、結論なのか不明確。時間オーバーした。（高校教員）

・生徒のプレゼンテーションに高校生の可能性を見ることができました。頑張っていますね。（高知県 高校教員）

・演出されたようにも感じ取れたが、まずそうしたシナリオを用意してやらせてみないと、生徒は方法が分からず、困惑するかもしれない。（名古屋市 高校教員）

・生徒が生き生きと発表しているのを見て感動しました。（生徒がみんな上品。茶髪もピアスの子もいたけど、ダラーとした子がいない。）目的意識をもってやっていた。（愛知県 高校教員）

・よくそこまで政治的に微妙な内容まで踏み込めたなと思います。私たちのような田舎ですと、生徒を政治的な問題に関わらせるのはタブーというか、上からの無言の圧力を観じます。高校生の感性を押さえつけてしまうのでいやなのですが、なかなか打破できない。「総合」の大きなネックとなっています。（滋賀県 高校教員）

年間を通しての学習に対する生徒の感想

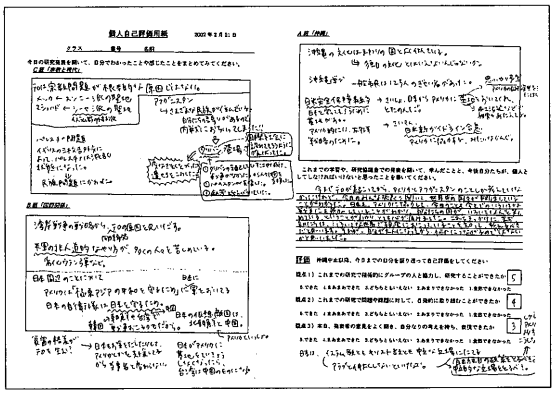
・まず第一に思ったことは、米の自己中心的な考え方や行動がどれだけ多くの人々を苦しめているかということだ。たくさんの民族・宗教問題に首を突っ込み、戦争化する必要のないはずの争いがどんどん大きく膨らみ、人々が死んだ。自分の国でテロが起こると、米国民が死んだことにものすごい怒りを表し、それを理由にして、報復攻撃を正当化した。最初、私も報復攻撃に対して反対意見を持たなかった。でも今思うと、これは米に協力的な日本の米側な報道に振り回されていたのだと思う。周りの意見や報道に振り回されず、自分の考えを持つことの大切さを知ることができたし、これを自分の目標にしたいと思う。

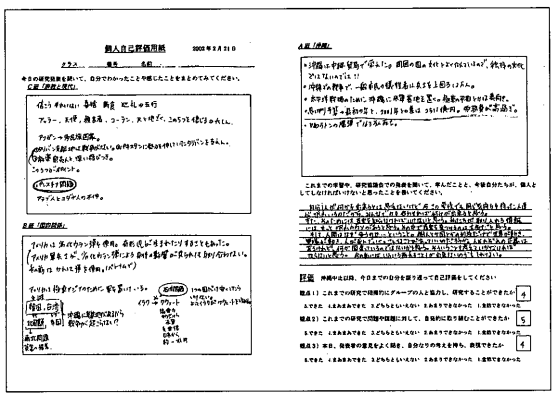
・知らなかったことがあまりに多くて、びっくりした。そして何も知らなかった自分に反省した。今回の研究旅行が中止になった理由が沖縄に基地があるせいだと思っていました。でも最後に発表者が言っていたことを聞いてそれはないのかもって思いました。テロの映像や情報がたくさん入ってきたことによって、恐怖感があったから旅行反対としてしまったんだと思います。でも当時はしかたなかったんだと思います。本当に恐怖との戦いで決めた決断だと思います。

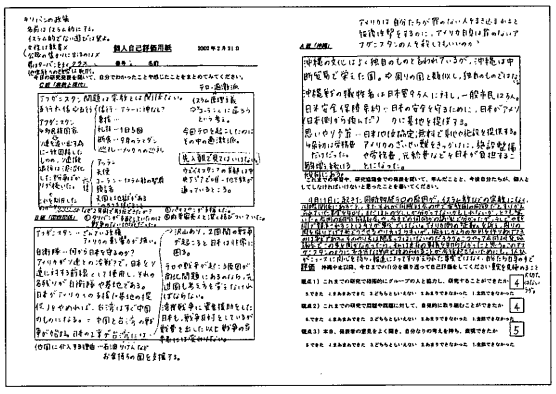
・宗教や民族の違いによって国際関係がうまくいかなくて、武力で相手をねじ伏せさせようとして、昔も今もやり方がかわっていないような気がする。昔から戦争をやっていて、それは恐ろしく、悲しいとわかっているのに、それを繰り返して平和に向かっていないと思う。だからといって今は他には何も考えはないけれど、一人一人みんなが考えを出せば、とても大きな良い意見がたくさん出てくると思うので、今回のテロをきっかけに、みんなが関心をもち、意見を持てるようになればいいと思う。とても難しい問題なので、うまく自分の意見はまとまらないけど、とにかく私は人が死なない方法を見つけたいと思う。

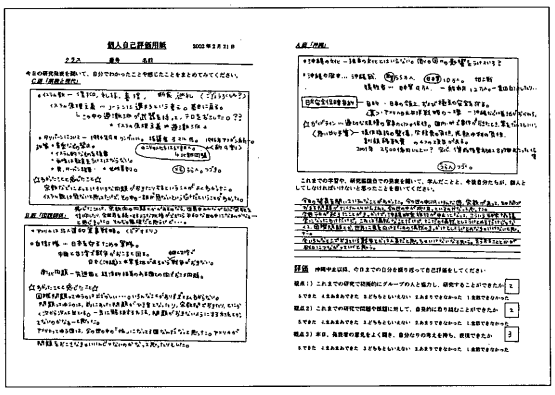
・世界で起こるそれぞれ一つ一つの戦争や事柄はいろんな国やその過去と関係していることが分かったと思う。今後私たちは一つの事件を表面からだけ見るのではなく、その周りの国との関係やその背後には何があったのかをしらべなくてはならないと思う。あと、自分の考えだけでなく、他の人の意見を聞いて考えるべきだと思った。そうしないと自分の先入観だけで一つの事件を見てしまって、偏見をもってしまうと思いました。

生徒の評価用紙の一例









キャリア形成を念頭に置いた総合学習

一日総合大学

７月７日に名古屋大学を中心に、他大学をも含め、学部教授に本校へ来ていただき、それぞれの学部における研究内容を生徒に講義していただいた。今年度の総合人間科の特徴のひとつとして生徒のキャリア教育が掲げられており、その一環として実施され、来年度以降にも繋がっていく予定の企画である。また大学での研究の様子を伺うことにより、「総合人間科」での、自主的な調査・研究活動の参考にしたり、キャリア形成のステップとして実施した。

参加した生徒の声―――

・工学と理学の違いについて、今まで深く考えたことがなかったので、自分にとって新しい発見がいくつもあった。
・「受験のための勉強」という先入観を持たされやすい高校の勉強をしている高校生として、大学の専門的な勉強というものはとても面白そうだと思う。
・現役の名大の先生のお話が聞けてとても楽しかったです。もっとたくさん聞きたかった。
・とてもいい刺激になった。

学習形態

前期　沖縄研究旅行のフィールドワークを視野にいれたグループ学習
後期　３大テーマ「宗教と現代」「国際関係」「沖縄」のうち、自分の興味関心があるテーマに別れてのグループ学習

評価

生徒個人による自己評価と指導教官による教官評価を相対的にあわせ、Ａ，Ｂ，Ｃ　の３段階で年度末に評価をだした。

	系　統	所　　属	講　　師
1	工 学 系	名古屋大学工学研究科	小野木 克明先生
2	経済学系	名古屋大学経済学研究科	竹内常善先生
3	法 学 系	名古屋大学法学研究科	神保文夫先生
4	農 学 系	名古屋大学農学研究科	服部重昭先生
5	文 学 系	名古屋大学文学研究科	栗本英和先生
6	文 学 系	名古屋大学文学研究科	江村治樹先生
7	理学部系	名古屋大学理学研究科	中西 彊先生
8	教 育 系	名古屋大学教育発達科学研究科	速水敏彦先生
9	医 学 系	名古屋大学医学部	島田康弘先生
10	芸 術 系	愛知県立芸術大学	二瓶浩明先生
11	家 政 系	金城学院大学家政学部	片瀬眞由美先生 間瀬正彦先生
12	福 祉 系	金城学院大学現代文化学部	杉本貴代栄先生

九州研究旅行行程

九州研究旅行(3/12～3/15)

第1日目　3月12日(火)

7:15　7:48　12:07　15:00
名古屋駅集合・出発――博多着 ═══ハウステンボス着----------
新幹線ひかり179号　　ハウステンボス自由散策
21:15
----------ハウステンボス内ホテル・アルステルダム泊

第2日目　3月13日(水)

8:15　9:15
ホテル・アルステルダム発 ═══長崎・城山小学校着 ----------
下平さん公演・平和セレモニー
12:35　12:45
----------平和記念公園発═══諏訪大社着・解散----------
爆心地公園・原爆資料館
15:50　16:00　18:00
長崎市内
自由散策

第3日目　3月14日(木)

8:15　9:15　9:50　10:05　10:30
休暇村雲仙発――大野木場小学校見学――みずなし本陣ふかえ見学═══
10:45　11:05　12:15　12:50　14:10
島原外港着・発＿＿＿熊本港着・発═══水前寺公園着・出発═══
フェリー　昼食・見学
15:45　17:00　18:00
阿蘇山西着＿＿＿阿蘇山西発═══内牧温泉ホテル一番館着・泊
ロープウェイにて火口見学

第4日目　3月15日(金)

8:00　10:45　13:30
内牧温泉ホテル一番館発═══太宰府天満宮着・見学・出発═══
12:15　14:05　14:20　14:49　18:50
═══博多キャナルシティ着・出発═══博多駅着・出発――名古屋着
自由散策・昼食　　ひかり104号

城山小学校で行われた平和セレモニーより

平　和　宣　言　文

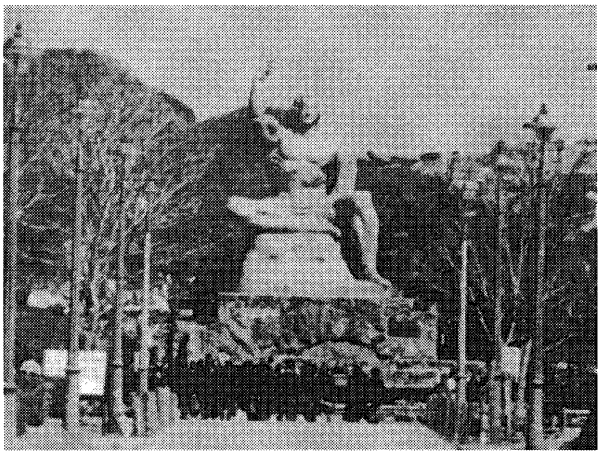
過去50年あまりの間、この日本は平和でした。というより戦争を直接体験していない私たちにとっては、平和であるということを当然であると感じ、その尊さに気づかずにいたのではないでしょうか。広島・長崎の原爆投下の悲惨さは私たちにとって頭では理解できても、肌で感じとれるものではなかったからです。しかし９月11日、アメリカで同時多発テロが起こり、世界情勢が一変してしまいました。沖縄や日本本土までもテロの標的にされるといわれ、私たちはもう知らぬふりはできぬ状態になってしまいました。私たちは今回のテロ事件も、広島や長崎の悲劇も風化させてはならないのです。

一方、今もアフガニスタンは戦場でありつづけています。厳しい寒さの中で明日を生きれる保証もない多くの子供たちの姿を、何不自由のない暮らしをしている私たちはただブラウン管を通して見つめています。

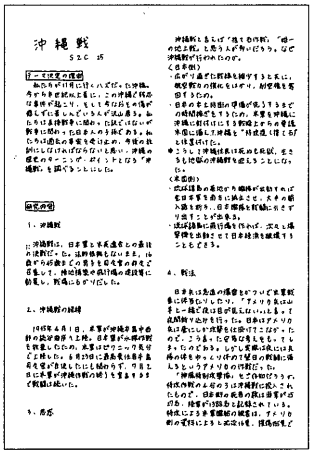
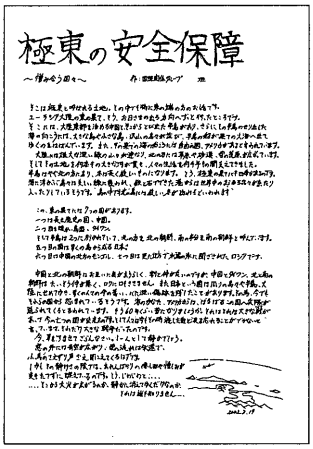
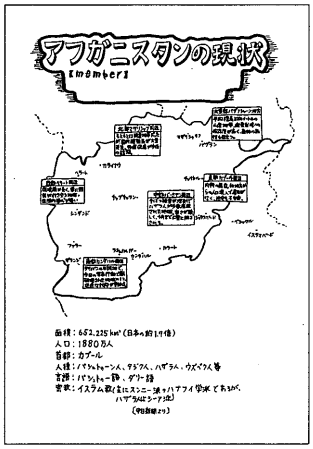
今春２月21日、私たちの学校で開催された研究協議会において、私たちは年間を通して調べてきた平和に関する学習の成果を発表しました。テロの原因を調べる学習の中で、視野が広げられ、私たちが今いる平和というものが、多くの犠牲の上にあるという事に気づき、学習したことを将来に繋げていく事を宣言しました。その意志を現実のものとするために、今、私たちがしなくてはならないこと・・・それは平和の中で生きていられることに感謝すること。平和を維持するために、身の周りのことだけでなく、あらゆることに関心をもって今できることを一つ一つ確認していくこと。そして罪のない人々の今を奪い、憎悪と悲哀の感情を植え付ける戦争というものの悲惨さを胸に刻んで、人と人とがお互いに理解しあい、思いやりを持って尊重しあえる環境を作っていくことが必要なのです。

今日、この長崎の地において平和への思いを新たに、私たちは原爆の被害に遭われた方々と、国内外すべての戦争戦争犠牲者のご冥福を心からお祈りするとともに、戦争のない平和な社会を築くために、最大限の努力をすることを誓います。

平成14年３月13日
名古屋大学教育学部附属高等学校　２年一同



おわりに

今年度の総合学習は初めにも書いたことであるが、９月11日（The Day of Terror）を境に大きく転換した。遠く離れたニューヨークの出来事がこれほど身近な問題になって私たちの身に降りかかってきたことはかつてなかったのではないでしょうか。あの日以来、連日連夜、新聞やテレビのブラウン管上では、国際貿易センタービルの映像がこれぞといわんばかりに登場し、犯人グループと思われる人たちの報道や国家間の取り引きなんかが紙面を賑わせていたことが記憶に新しいことでしょう。しかしそんな「他山の石」的要因が私たちの研究旅行中止を導くまでには多くの時間を要しませんでした。10月も半ばになって中止が伝えらたとき自分と世界の繋がりをとても身近に感じた生徒がたくさんいました。総合学習は決められた教科書の上を順風にのって進んで行くものではありません。いろいろな刺激や方向転換があって当然の教科であると考えています。また教師が教師を最後まで演じつづけていては決して成功する教科でもありません。すべてを知っていなければいけないと自分の枠の枠の中に止まっていてはなにも進展しませんし、総合学習の本質からも外れていってしまうと思います。生徒とともに学び・調べる姿勢、生徒から学ぶ態度こそが求められている要因の一つではないでしょうか。詰め込み学習に追われる日々から得られる「生きる力」なんてもろい物です。教師はなんでも知っていなければいけないという変なプライドなんてかなぐり捨て、生徒とともに新しいことを学んでいく知的探求が必要であり、それが総合学習を成功へと導く秘訣であると思います。

高校２年生研究集録より